

第92回微生物ウイルス専門調査会後の第6章までの主な修正・追記状況等一覧（新旧対照）

※その他、体裁、軽微な文言等の修正を行っています。

2024年7月時点作成

No.	該当箇所 ページ	委員からのご指摘・ ご意見等	リスクプロファイル(案)の記載 旧	リスクプロファイル(案)の記載 新
1	p.12, L27 ～	検出法の知見の追記	d. キャンドリング法（光透過法） 組織片をガラス板で圧平するか、あるいはフードプロセッサー等で組織を破碎したのち、それを白色光や紫外線の透過光、あるいは落射光に当てることにより虫体を検出する。（参照 3-43）	④キャンドリング法（光透過法） 組織片をガラス板で圧平するか、あるいはフードプロセッサー等で組織を破碎したのち、それを白色光や紫外線の透過光、あるいは落射光に当てることにより虫体を検出する。（参照 3-43） なお、魚の筋肉組織内のアニサキス検出方法として、組織片をプレス（圧平）する等の後に紫外線（UV）を当てる方法（UVプレス法）（ISO 23036-1:2021）及び人工消化液を用いて虫体を検出する方法（ISO 23036-2:2021）については、2021年に国際規格（ISO 認証）を取得している。（参照 3-44）
2	p.28, L3 ～	【浅井委員、小坂委員】 食物アレルギーの食物負荷試験と皮膚試験について、皮膚試験も倫理的に困難なのか。	・ 通常食物アレルギーの確定診断	（※脚注も離れて付いていたため、わかりにくい箇所があるため、以下の赤字のとおり、修正案を付けた。） ・ アニサキス虫体を食物アレルギーの確定

		わかるように、分けて記載する修正が必要ではないか。	<p>で用いる食物負荷試験²⁰では、アニサキス虫体、すなわち寄生虫を負荷試験に用いることが倫理的にも困難であることや皮膚試験を行う場合には、全身性の副反応が誘発されるリスクがあることも含めて、試験の実施が困難であること。</p> <p>・アニサキス特異的 IgE 抗体の検査において、抗体価の上昇（感作）は、アレルギーの臨床症状の発現に関係なく、アニサキス症の生体防御反応としての IgE 抗体の上昇を認めることから、IgE 検査のみでは過去のアニサキス症とアニサキスアレルギーを診断することが難しいこと。</p> <p>が挙げられている。(参照 4-44、4-51、4-61～4-66)</p>	<p>診断で食物経口負荷試験²²に用いるには、医療機関も限られている等の難しさがあること。</p> <p>・皮膚試験を実施する場合には、全身性の副反応が誘発されるリスクがあること等から試験の実施には注意が必要²³であること。</p> <p>・アレルギー検査の際、アニサキス特異的 IgE 抗体が検査されない場合が少ないこと。</p> <p>・抗体価（アニサキス特異的 IgE 抗体価）の上昇（感作）は、アレルギーの臨床症状の発現に関係なく、アニサキス症の生体防御反応としての IgE 抗体の上昇を認めることから、IgE 検査のみでは過去のアニサキス症とアニサキスアレルギーを診断することが難しいこと。</p> <p>が挙げられている。(参照 4-44、4-51、4-61～4-66)</p>
3	p.33, L8	【横山委員】 文言修正	リスクは管理	リスクを管理
4	p.33, L23 ～	【浅井委員】 96.1%が <i>A. pegreffii</i> とある		(※基本的に原著の記載ぶりとして書いているが、わかりにくい箇所があるため、以下の赤文

	<p>が、日本海側はそんなものか。検体は筋肉と内臓と、どちらか（移行のしやすさも加味してお伺い）</p>	<p>給餌する餌や期間による影響について調べた報告もある。まき網漁法により日本海の漁場で漁獲され、海面生け簀に収容し、凍結魚（凍結イワシ又は凍結サバ）を与える給餌飼育を行ったマサバ（畜養サバ）について、飼育21日、51日及び82日後に20尾ずつ試料採取を行い、アニサキスの寄生状況を調べた研究では、給餌飼育21日後のアニサキス寄生率は100%であったが、51日後には85.0%、82日後には50.0%に減少した。同定されたアニサキスのうち96.1%が <i>A. pegreffii</i> で、3.9%が <i>A. simplex</i> s. s.であったとされ、マサバに寄生するアニサキス幼虫数について、<i>A. pegreffii</i> は給餌期間を通じて平均寄生数も減少したが、<i>A. simplex</i> s. s.の寄生数は給餌期間もほぼ一定であったとされた。なお、給餌期間におけるマサバの体重と魚体当たりのアニサキス幼虫数に相関は見られなかったとしている。（参照 5-3.</p>	<p>字のとおり、修正案を付けた。）</p> <p>漁獲したマサバを生産調整や品質の均一化を図るために、生け簀で一定期間給餌飼育することがあるが、この期間中にアニサキスの寄生数が増加するかどうかについて、給餌する餌や飼育期間による影響を調べた報告がある。本調査では、まき網漁法により日本海の漁場でマサバを漁獲後、海面生け簀に収容し、凍結魚（凍結イワシ又は凍結サバ）を与える給餌飼育を行い、アニサキスの寄生状況を調べた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめに、10月6日に漁獲したマサバ（畜養サバ）群では、調査開始時点でアニサキスの寄生率が86.7%、1個体当たりの平均アニサキス寄生数±標準偏差は、4.3 ± 6.8 隻であったが、給餌飼育31日後のアニサキスの寄生率（%）及び平均アニサキス寄生数±標準偏差は、100%（19.8 ± 31.3 隻）となり、飼育期間中に有意に増加した。なお、増加の理由は不明とされた。 ・次に、10月20日に漁獲したマサバ群では、給餌飼育21日、56日及び82日時点におけるアニサキス寄生状況を調べた。給
--	--	--	---

			古下学 2022)	<p>餌飼育 21 日後では、100% (11.1±14.1 隻)、56 日後では、85.0% (2.65±2.9 隻) であり、82 日後では、50.0% (0.85±1.3 隻) までに減少した。このような減少の理由として、海水温の低下により比較的高温性とされる <i>A. pegreffii</i> が、マサバの給餌飼育期間中に死亡した可能性が指摘されている。</p> <p>本調査中で検出されたアニサキスは全て内臓に寄生し、筋肉からは検出されなかった。また、同定されたアニサキス 153 隻のうち 147 隻 (96.1%) が <i>A. pegreffii</i> で、6 隻 (3.9%) が <i>A. simplex</i> s. s. であった。給餌期間におけるマサバの体重と魚体当たりのアニサキス数に相関は見られなかったとされている。(参照 5-4)</p>
5	p.34, L22	【横山委員】 行を詰める		(※空いていた行間を詰める修正を実施済み)
6	p.36, L1	【横山委員】 冷凍処理の前に温度 (-●℃) を入れる	24 時間以上の冷凍処理	(※温度条件を入れて追記修正) 24 時間以上の -20℃ の冷凍処理
7	p.37, L19 ~	【横山委員】 文言修正	1 歳以上の者と対象とした調査にお	(※不要な記載を削除修正) 1 歳以上の者と対象とした調査において、

		1歳以上の生魚・・・	いて、1歳以上の生魚（あじ・いわし類・・・	1歳以上の生魚 （あじ・いわし類・・・
8	p.37, L22	【横山委員】 文言修正 上ではの平均	同摂取量は20歳以上ではの平均摂取量は	(※不要な記載を削除修正) 同摂取量は20歳以上 では の平均摂取量は
9	p.38, L18 ～	【横山委員】 「 <i>Anisakis</i> 属の存在量のみが増加していることが明らかになったとされる。」(この部分がわかりにくいと感じました)	なお、 <i>Anisakis</i> 属と <i>Pseudoterranova</i> 属の存在量の長期的な変化に関するレビューによると、53年間(1962年から2015年)にわたって <i>Anisakis</i> 属の存在量のみが増加していることが明らかになったとされている。	(※調べた結果増加している旨、補足追記) なお、 <i>Anisakis</i> 属と <i>Pseudoterranova</i> 属の存在量の長期的な変化に関するレビューによると、53年間(1962年から2015年)にわたってこれらの存在量を調べた結果、 <i>Anisakis</i> 属の存在量のみが増加していることが明らかになったとされている。